四、日本海々戰（極秘）

海軍

（本田稔）

0370

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

項目　日本海々戰（經過）

綱目　遠征配備北部戰と現狀維持說

財部大將

次に移ります。仮田中將願ひます

仮田中將

との問題に就いて、方々で種々話がありましたので、又我々も方々で聞かれましたので、それに就きまして當時の雜誌、新聞などを見ますると、「三笠艦上に軍旗を開く」と云ふことが出て居ります。所が會議を開くと云ふことは我々は何とも思はないけれども、世間の人は今頃何でも物を談すると云ふ頃から見まして、やはり其處でワイワイ云つて多數

（木田稿）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

決で何か決めるだらうと云ふやうに思ふのでして、私など講演の時は三笠艦上に軍議を開くと云ふことは「指揮官、艦長來れ」と云ふことで長官の下に集められて種々打合せ、其外細かい訓示等の有る場合に集められた、それで決して軍議を開く爲に旗艦で會議を開いたと云ふことはない、そこで會議を開くと云ふことは一體秋山參謀(注當初から反對で長官たるものが軍議を開くと云ふことをしてはならぬ、軍議を開いて初めて戰爭に移ると云ふことでは攻擊は出來ないと云ふことを始終云つて居られました。ですから會議を開く爲に三笠に人を集められたと云ふことは始めから終まで一度もない、其時は「指揮官、艦長來れ」と云ふことで他の時でも無論皆んなが心配して居るから、それを參謀長が主にな

(本田他)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

つて種々皆さんの御意見を承つて居られた、東郷元帥はそれを聞いて居られなかつたこともあつたと思ふ、けれどもそれが決して会議の目的の爲にお集めになつたちやないと云ふことを諸所で脱明して置きました、それからあの時の會合の様子は私は全く知りませぬ、これは佐藤中將及森山、山路中將の如き首席參謀は各兵官司令官についてその室に入りますけれども、當時聯合艦隊司令部では秋山參謀と世話をする永田副官が行くだけで我々は參りませんから中のことは承知致しません。ですからあの時はどう云ふ話があつてどうであつたかと云ふことを聞かれますけれども實際は私は見て居りません、私の伺つて居ることは寧ろ其處ではなくして食事の時に三笠の事件だけが毎夕の食事の前にテイブルの上で

海軍3

(末田)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

よく話が出る。當時の談話等より判斷して東郷大將の最後までゐすとは
覺として動かぬと云ふ御決心は例はれます。
又其の移動先きの場所にも種々な議論はあつたでせうが、只今のお話の
やうに種々の電報もあり情報もある、兎に角二二、三、四、五日迄は非
常な心配であつた、けれども上海に例の船が入つたと云ふことを聞いて
みんな貴は肩の重荷を降したのであります。そして東郷大將は無論動く
と云ふことをお考になつて居らなかつたと考へて居ります。又會合のこ
とは他の參謀の方で御承知のことと思ひますから私から申上げることは
それだけでございます。

佐藤中將

海軍4

（本田）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

あの時は私も聞かなかつたのです。實はあの時の經緯は私の身の關係して居つたことに止めて申上げます。今の秘密命令の來た時に私は實は少し氣にかかる事があつて上甲板を散歩して居つた、そうしたら藤井參謀長が下から顔を出されて「佐藤參謀」「佐藤參謀」と呼ばれるから「何ですか」と云ふと私の部屋に來ないかと云はれ、早速參謀長の部屋に行つた、所が「實は俺は斯う思ふが君はどう思ふ、一體君はバルチック艦隊は何處から來ると思つて居るか」と云ふから、「いや私にはそれは判りません」而し對州海峽と陸奥海峽の兩方の一を通つて浦鹽に行くものと考へてこれに應するのが一番間違がなかろう萬一東の方に廻つたとするならば日本の近海と云ふ譯には參りません、又その間に石炭を積みます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

から、夢々二十五、六日頃に津軽海峡にかかると思ふ、さうなつても例らなければしやうがない、私は函館の鳴前に移る。そうすれば津軽海峡から清津に参る途中で間に合ふるそとからなら蝦夷州海峡に來たと見ても間に合ふから仕方なければ函館の鳴前に移るですな」と云ふと「君は移る出方か」「いや私は移る方です」と云ふと、「何時移るのか」と云はれるから「夫れは二十六、七日頃です」と答へました「そんなら君は二十七日頃になつてから移ると云ふのなら移らぬ方ちやないか」、「いや移るですよ」と云ふと「可笑しいな、君は移らぬ方の意思ちやないか」「今移ると云ふのですか、それはとんでもない話である」参謀長は「さうすれば第二艦隊の意見として移らぬ方を主張して差支へないか」と云はれ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

るから「差支へありません」と云ふた、そとで藤井參謀長は下村參謀を連れて旅館に行かれたです、それから歸つてから話を聞きますと、被處で種々問着があつたらしいです。その問着と云ふのは其時に何か少し誤解でもあつたと思ひます。さうやつて居る内に島村司令官が遅れて三笠に來られ、さうして藤井さんと一緒に話をして居つた。何でも二人で東郷さんの所に出掛けて行つて「盡々殘る」と云ふことに一致したのであります、そこで藤井參謀長の御話に「やつぱり俺は何と云つても島村には敵はぬ」「東郷さんの個用がどんなに違う」「俺が何を云ふても駄目だが、島村君が云ふとさうだと云ふ、とても敵はぬ」といふて居られました。後で私は實際の有様を聞きたいと思つて東郷さんに伺つた、所が東

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

藤さんが「あの時加藤が来て向に移るとか言ふて居るから」次の情報を待つた」とさう云つて置いた」と云はれた、それで私はハツキリしたと思ひます。それに今の島村さんと藤井さんと二人で行つた時の話をも聞いて見ましたが、「あれは全く自分の考と同じだから、さうだと決めて其通りいうた」、さう云ふお話でした、そこであの處が明になつたと思ひます。

小笠原中將

私は元帥からそのことに就いて聞いたですが、やはり世間には會議を開く云々と云ふことがあつたが、私はそれに就いて疑を持つたから聞いて見た。もうした所が元帥は「俺は會議を開かなかつた、それは加藤が

海軍

（本田）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

集めて種々のことを聞いたかも知れぬけれども、俺はその席には居らない。所がその後で島村と藤井が俺の所へ來て島村が閣下は敵の海軍が何處から來ると思ひますと聞くから、「それは朝鮮海峡だよ」「それならば申上げることはない」と云ふたが、其時に藤井は何も云はなかつた、これが事實だよ、」と云はれました。これは御參考までに申上げて置きます。

森山中將

同會議が三笠に行かれた時に私がお供して行きましたが、幕僚室に私は居りましたが、その中風生さんが飛つて來られましたが、何かさう云つたやうなことを話されたと思ひます。何を話されたか、會議などはあ

海軍

（木田）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

つたやうなことはサツパリ知つて居りません。どうしても参謀長の所で銘々思ふ所を話されて解散と云ふことになつたぢやないかと思ひます

それから密封命令は司令官が何でも握つて居られたやうに承知して居ります。私は今日初めて密封命令の内容を承知した次第であります

佐藤中將

私が藤井参謀長からお伺ひ致したことは大澄諸閣下のお話の通りであります。藤井参謀長は何でも暫く此處に居ると云ふことを決めて上村長官に同意を求められヴェデフトの中で「北進説が出るか知らぬが、これは何卒保留して貰ひたいと云ふこと」を申上げて置いた、それで向に行つた所が北進説が出た、所が上村長官はすぐるま賛成なさつた、それで

(末田納)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

自分の立場が非常に困つた、その時島村司令官は留手に居られたが、餘場が違いから一番遅れて來られた、遅れて來られてその前の狀況を何も判らずに北進說に付いてはどうもと云ふことで、これは藤井參謀長から聞いたから私は其處に東郷長官もお居でになつたらやないかと思ふ、それで島村さんが「もう暫く此處にお居でになる方が宜し」、さう云はれると、それが非常に効目があつて長官は同意られた、それで自分は國底島村には及ばなかつたと云ふことを云はれましたといふことでした。御參考まで。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

附部大將

まる其位に止めておいて時間があつたならば後で伺ふとして「」動に關する敵國に就いて」山路中將にお願ひ致します。

山路中將

南遣支隊は「我が艦隊將來の行動に對し敵を撹亂せしめ且今後の作戰に資するが爲、支那海南部諸要地の偵察及び爲し得ば敵が其艦隊主力の東洋來着に先ち、バタビヤ方面に對し後ち其軍需品を燃燒せんとする企圖を成遂撹亂するの目的を以て、新嘉坡方面に行動せしむ」斯う云ふのが南遣支隊の任務であります。此國令の趣旨に適合する爲め如何に動すべきかも我は色々と考へました。夫れで第一には無線電信を皆く使

海軍 12

(木田稿)

0382

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ふことだと云ふことを私は考へました、それで恰度南遣支隊が香港の近か神合を通つて居る時に英國軍艦の無電を感受しました、これはしめたと私は思ひましたから、それで長距離遠信を以て恰も遠方に在る味方艦隊に通信をするかの如く無電をやつて矢れと無電係に命じた。どれだけのことをやつたか今それを私は記憶致して居りませんが、大体その通りやつて矢れました。これが旨く行つたらやないかと思ひます。則ち受て英國海軍に對し第一回の偽動を試みました。「キンコキ」湾、バンフオン湾に將來敵がどうしても進入るのだから偵察しなければならぬ、それには何か旨いことをやらなければ日本の軍艦が港内に入ることは一寸具合が悪い、それで口實を考へました要旨は日本の大艦隊に圍繞して居る

海軍 13

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

潜航艇中の一隻が暴風の為め本隊と分離してまだ帰隊しない、それで捜索に来たと云ふのです。伊東香港丸航海長は在港の佛國先任駆逐艦長を訪問して此事を談しました。さうするとそれは大変なことだと云ふやうな具合で大変同情して自分達も不日出港するから心当りを捜索してあげますと云ふやうな具合で　勿論出来同時に同港の偵察も出来ましたから佛國海軍に無暗と心配されちやいかぬからもう一ツやつてやらうと云ふことで、今度は「サイゴン」沖を通過の時に佛國東洋艦隊司令長官宛電報を發しました、夫れはカムラン湾で御心配をかけた駆逐艦が其後無事に帰つて来たからどうぞ御安心下さい、誠にどうもありがたう御座居ました、さう云ふ意味の電報でした、向ふより電報を繰り返せと云ふ

海軍 14

（末田稿）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ことでしたからそれを何度も何度も繰返して遂に無電距離外へ出てま
た。其後シンガポールに入つた所がシンガポールの新聞には日本の軍艦
が二十二隻沖の方に居る、その中三隻が内港に入つて来た、これは東郷
大將の率ゆる艦隊で二月十五日に作戰命令を受けて佐世保を出發したも
のだと云ふことでありました、又この艦隊は先頃香港の南方百海里にあ
つたものであると斯う書いてある、これで大變旨く行つたなと斯う私は
思つて居る、尚新聞に書いてあるのにはドイツの艦長何某は約十日前に
香港の南方に於て二十二隻の日本艦隊を見たと、斯う書いてある、ロシ
アの國では情報を取らうとして居るから斯う云ふことは直に傳はる、そ
れから後聞へりがけに此ボルネオ島「サブアン」湾に入つた時はとれは

海軍 15

（本田稔）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

軍令部からの電報でありますが、ベルリンの井上大佐よりの來電によれば、ベルリンにて發表の倫敦電報に曰く「日本巡洋艦三隻給炭船一隻は三月十五日シンガポールに到着せり、又二十二隻の日本軍艦はシンガポールに以東二十二哩の地點に見受けられた」斯う云ふ具合に見えて居ります それでシンガポールを出ました後の行動を聞きなければならぬと思ひましたから西の方に行くのであるか南の方に行くのであるか問來るだけ判らぬやうに航路を時まして遂にボルネオ島のラブアンに入つたのであります。ラブアンから内地に帰へるのにはこれは中央部からの御注意でありまして、佐世保へ帰つたならば機密が漏れるから佐世保へ來ないやうにと云ふので鎮海灣へ各艦隊別々に入つたのであります。最の時には先

海軍 16

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

財部大將が云はれるやうに種々の方面から情報を得ようとして居るのであるから、そこに旨い策略をかけたならば必ずかかると私は思ひます。これは日本人の非常な長所で私は度々申しますのでありますが、日本の陸軍はドイツから習つたドイツ戰術を日清日露の戰爭に盛んに用ひた夫れは力の戰である運動の爭である、海軍も亦英米の敎を若干受けて居るのであるが、有難いことに我國には其の偉い大將が謀略に於て色々と敎へて居る、日本人はこれから後の戰の時にもやはり斯う云ふことをしなければならぬと私は考へて居るのでございます。私は英國戰の情報を見ましたが、日本の水雷艇が何處何處に在る、シンガポール方面に在ると云ふことを始終報告して居る、敵の大將にロゼストヴェンスキーは皆な日本の

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一艦隊を出し抜いたと考へ徐々と日本海へ針路を採つたかとも考へます、之は實際向に聽いてみなければ判りませぬ。尚其時に自分の考へたことを多少附言しておきます。

南遣支隊がシンガポール方面を攻撃して個部隊へ帰つた時に高木七太郎軍令部參謀が所謂將來の策戰に對して大本營の此を決める爲めかどうか存じませんが、私の所へ聞いて來た、之に對し長い答案を私が出したのですが、それを長いから朗讀致しますが、（中略）

これは私の高木參謀に對する答でありますが、暑い時分の艦隊行動と云ふものは能く行きません。私共は一ケ月の行動でありますが相當に暑さを感じました。之を見れば艦隊は常時開戦海面とコンパスを決んだ

海軍 18

（木田談）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

やうに就海が出来るものでやないと思ふ、これは秋山参謀から東郷さんにもお話になつたと思ひます

財部大将

海軍 I9

（本田稔）

0389

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「大轉舵の時機に就いて」佐藤鐵太郎中將にお願ひ致します。

佐藤中將

極く簡單に申上げる心組でありますが、大轉舵の時機と仰しやるのはロシヤ艦隊と出會頭に取舵をとつて敵に突掛つたことと斯う考へて宜うございますか。

財部大將　宜う御座居ます。

佐藤中將

あのことは私は後方から見て居つて非常に感服致しました、それと同時にこれは危いなと云ふ感しを起し敵の艦隊の頭を抑へる因縁の爲には少し晩かつたと思ひました。それから或時に私は必要なことがありまし

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

て、その時の心持を東郷元帥に聽きました。その前にあのことに就きましては、何となく非常に特に合はないことがありますから秋山に「偉いことをやつたなあ」と聞いたことがあります。その時に秋山が云ふに俺はあのことは知らなかつたと云ひましたので、そんなことでは仕様がないから「お前ぢやなかつたか」と云ひましたが、實は私は秋山の恬淡なるに感服したのであります。それから其後に伊地知三笠艦長の性格上から判断して彼の人でなければ出來ぬと考へましたから、恰度線留艦隊の司令官として居られたときに私は宗谷艦隊長として其部下に居りましたので「どうもあのことは貴下のやうな性格の人のやることで貴下ぢやないですか」とさう云つたら伊地知司令官は「あの時に自分の意見が通つた

海軍21

（末田綴）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ならばとんだことになつたらうか、私は反航して陣形を整へてからでないと勝味がないと思ふて其れを主張したのである、もしその説が通つたなら私は実に恥しいことになつてしまつたぢやないかと云ふことで、これまた私は非常に美しいことと感じました（篤骨にいはれたこと）私はさうするとあれをやられたのは東郷さんか加藤参謀長の二人しかない譯で、どつちになつても一寸具合が悪いので私聞くだけの勇氣を持たぬで居つた、その中に　今上陛下が摂政宮でおいでなされた時に御人拂で戦の様子を話せと云ふことの畏命を受けて七八回連續御進講申上げたことがありましたが、其時にどうしてもこの點が不明瞭でいけませんから東郷元帥の所へ伺ひました（前にも島渡申ました通り）、そしてお話を願

（末田稿）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

つたのでありますが、ア、云ふ風に突掛たのは非常に無謀のやうにも思はれますが、あれはどう云ふ譯です、貴下がおやりになつたのですかと伺ひますと、斯う仰しやいました、「佐藤、八月十日の戰を知つて居るだらう」と云ひますから「はい存じて居ります」と申上ると、あの時は一傍觀をやり過してからドウシテも追ひ附かん五時間も經つてからやつとの事で追ひ附いたが到々あのやうな面目くない結果を生じた、それだから私は今度ロシヤ艦隊が來たならば其時にはもう出會頭に突込む心組であつた、それでやつたのだ」と云はれました、それでもう明瞭に判りましたからそれ等のことを加へて申上げました、其後山本英輔大將が大學校長で今村信次郎少將が教頭であつた時代に要求に應じて其時のと

（本田紳）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

とを申したことと思ひますが、山本校長もよく判つたと云ふことでありました。其時に今村教頭が初めて今日判りました、あの時は自分等は本當の子供ですから敵前であるのに「ブリヂ」の上に議論など始まつてよいのかしらん一體ドウなることかと思ひ實は心配して居つた所が、一寸氣を付けて見たら、長官が右の手を振つて居る、さうしたら誰方か判らぬが、參謀長だらうと思ふが、取舵一パイであつたかどうか知らぬが、取舵と云ふことで艦首がヅツト廻つたといふことでした。大轉舵の動機と云ひますか、その時の事に付いてはこれだと思ひます。又あのやうに敵の頭を抑へて同航の位置まで進んだと云ふことは速力のお蔭でせうが一時の不利を凌いでも後のことを考へてあの勇斷を行ひになつたことに

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

對して私は大いに敬意を表して居ります。それから今の事と後の方の事と續きますが、後のとても一緒に申上げて宜しうございますか。

財部大將　佐藤中將はお急ぎだきうぢやから次の所をお願ひ致します

「第二戰隊の獨斷專行的行動」と云ふ所を願ひます。

佐藤中將

それから戰を繼續して參りまして相當敵には被害があつたやうでありますゝオスラビヤなどはもう列を離れましたがなかなか敵は頑强で別段これと云ふ大なる損害は受けて居らぬやうにも見えて居ました、私は其時の有樣をありのままに申上げますが、私は一生懸命になつて敵の旗艦スオーロフを見て居りました、所がスオーロフは信號は何も上げておら

(末田納)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ぬやうであるけれども急に取舵に廻つた、ダツト廻つてそのまま暫く能くハツキリ判りませんでしたがコツチから見て居りますと、他の船も廻つてゴチヤゴチヤになりますから妙なことだ、と私は見て居りました、それで私はこれを舵に故障を起したと判定しこれは宜い機會だ、今の内頭を押へなければと思ふて居りましたが、私は如何にも不注意でありましたかも知れませんが一生懸命になつて敵艦を見つめて第一艦隊の事など余り氣にかけずに居りましたら、山本參謀が斯う云ふのです。「佐藤參謀信號を降して宜しうございますか」と云ふ、そこで私は「何か」といひながら出雲の「ヤード」を見ますと「左八點轉動」の信號が上つて居るのである私はこれを見て此大切な白熱戰の時機に敵と反對の方向

左照合横にあり

海軍26

（末田談）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に九十度の旋回をなすか如きは何事かと思ふて憤慨しながら退はず艦を動して「イケナイ」といふたのでありまず、其時次席参謀たる下村少佐は早く取消さぬと第一艦隊を誤解させるであらうといふ意味の注意を與へて呉れましたが此の如き場合に此の如き綿密なる注意はエライと思ひましたが思はず「第一艦隊ナド構ふものか」と呼ひながら第一艦隊を見ますと八の字運動をやつて居るのでありまず、これではモウ仕方がありませんドウしやうかと思ひましたが、断然好機会に乗せねばならぬと決心致しました、のみならず第二戦隊は其儘直進致しましたから第一戦隊と離なつた形となりましたからモウ仕方がないと思ひまして、上村長官に向ひ「モウ仕方がありません、面舵を取つて敵の頭を押へませう」と申

海軍27

(東郷)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

上げたら、長官はすぐに「宜からう」と仰しやいました、さうすると旗伊地知艦長が大きな聲で「面舵」と號令をおかけになつた、これは殆んど待つて居ましたといふやうな具合でした、そうすると舵手が遂てる樣に急いで舵を取たので思はずも大きく取すぎた結果となり闘くひまに敵との關係が二千四五百乃至五六百メートルの間になつてしまつたのです。それから第二戰隊の諸艦が猛烈に砲火を注きかけたので殆んと気盛發なしといふ有樣で誠に壯快極まる狀態となり敵は殆んと一丸をも發する事が出來ず艦列はまるで亂れてしまひました、そこで第二戰隊は一旦右を廻つてそれから更に引返して來ましたが、その引返して來ました時にスオーロフは煙に一樣杯取卷かれてただ煙が海上を覆ふ丈けて能く見るとス

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

オーロフといふことが分つた位です姿は一寸見る暇もありませんでした、メンマストも半から折れて居る、煙出も二本とも無くなつて居る、そんな狀況でした、それに又そんな所へ千早が攻撃するやうなこともありましたが、その後に第一戰隊の方も闘つて來たので第二戰隊はこれか先頭に立ちました、そこで第一戰隊は何故に「八の字廻動」をやつたかといふことは如何にも不思議に思ひましたから其後加藤參謀長に伺ひました所が判りました、加藤參謀長は敵のスオーロフが取舵を取つたから、それは恰度第二戰隊の艦を通つて行くと濠塁の方に行けるのですから、それで濠塁の方に逃げるちやないかと云ふことを感じたから、その逆路を遮る爲にやつたといふことでありました、このことに付ては其後東郷元

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

師に何ひました所があすことはどうもその時は逆列になつて困つた。それであのやうに元のやうに戻つて來て戦に間に合ふ様にしたのたといふことでありました。あの戦のことに關し今日まで疑を有つて居るのはあの大切な場合に第一戦隊があの通りの行動を取り（左轉の意味）何故に敵の先頭を壓して面舵をとらなかつたと云ふことでありますが、敵が第二戦隊の縫を廻つて浦塩に逃げられてはいかぬからやつたのだといふ道理を聞いて見ますと、私は何ともそれに對して意見はないことになりますが此意味から見れは第二艦隊が獨斷專行をやつたと云ふことになりますが、あれは獨斷專行ではないので彼我の對勢不得已してヤツたのであります。又長官もその通りの心持で、直ぐ「よかろう」と仰つたと思ひま

（本田）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

す。其後戰が了んでから私は齋藤參謀長にお辭　を致しました（私が參謀長に申さずにイキナリ長官に獻策したことに就いての意味です）さうするとお參謀長は、いや君が宜い時に宜いことをやつてくれて有難う、さう仰やいましたから私は加何に急を要する場合とはいへ參謀長をぬきにして長官にすぐ云ふたことに就きましては許るされたやうな氣が致しました、それ位のことで別に申上げることもございませんが、一寸氣のついた所を附加へます。私の職に臨む時の考は言ふまでもないことでありますが、これを大學校の資料に供されると云ふお考があると云ふことでありますから申添へますが、今、日本精神とか或は大和魂とか云ひますが、さう云ふものを現し得る機會を始終ねらつて居ると云ふことを心掛

海軍 第1

（末田納）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

けて置く必要があると云ふことと、（對敵行動中「武士の情」といふ如き意味）それからもう一ツは司令官なり司令長官なりに對し生意氣なことを申すやうでありますが、この司令官なり司令長官なりが一生懸命におなりになるときは自ら性格が出て來ることは爭ふべからざることでありますが、一生懸命になればなるほど自分の性格が出る、西洋の戰史などを見ましてもこれは明瞭に判ります。それでその輔佐として働く所の參謀なるものはこれを能く辨へて自分の長官の美點を何處までも美點として現す、缺點は誰もありますから、その缺點を云ふことに付いては身を以てかばう、兎に角どこまでも司令長官をして缺點を現はさせないやうに、たまには長官の意見に反しても是非さうせなければならぬと堅く

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

信じて居ります。この點が簡單でありますけれども大學校あたりの御參考になるならば今の二ッの點を申上げて見たいと思います、少し不明瞭なことでありますけれども、私はもう考へますので申上げました次第でございます。これで終に致します。

財部大將　今度は飯田中將にこの大轉舵の時機に就いてのお話を一ッ願ひます。

海軍

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

大轉舵の時機に就て

飯田中將　大轉舵の時機に就きましては實は私は其場に居りません。恰度あの前に參謀長が長官と自分と秋山が此處に居るから飯田と永田と清河參謀は下の甲板に居れと云ふことで下の甲板に居りましたので、實際あの轉舵の時機は見て居りません。然ながら八月十日の海戰でこつちが少し遲れた爲に非常に不利であつたと云ふことは誰も痛切に感じて居る、ですから、今度はどうしても同じ緯度の線から敵を南に見て戰をしなければならぬ、敵を北に見たならば大變だと云ふ、斯う云ふことをみんなでいつも考へて居りました、當時鎮海灣を出て日本海のあの位置の方に向つて行く時に恰度私はその針路を定める樣に命せられたのであり

（永田談）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ますが、それで參謀長にどの邊に向ひますかと云ふと、敵が出て來るのを頭を押へるのであるから加藤參謀長の命を受けて自分で考へて針路を決めたやうな次第であります。敵の出て來るのを頭を押へて戰をするのだと云ふから、沖ノ島の方へ行つてあのZの信號の上々場面になつたのであります。Zの信號が上りました時は敵の艦隊は見えて居りましたが、その中又見えなくなつて、不思議なことと思ふものあるものだなあと思つて居りました、其時自分の考へではもう少し早く前に廻つた方が宜からうと思ひましたが、上の甲板の經緯は安保大將が能く知つて居られますので私も講話をする時は安保大將のお話の通にして居りますが、安保大將は艦艇の狀況を實際に見て居られましたから其方にお讓り致します。

（本田談）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

兎に角、敵の頭を押へて戦をするのだと云ふことは皆の頭に入つて居つたと思ひます。其の時の感じは、あれ程迫つてお曲げになるならば其の前に曲げてはどうかと思つて居りましたが、兎に角非常な勇断でありました。

其他のことに就きましては安保大將に御願ひ致します。

（木田談）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

安保大將

私は此處にある大將能の時機に就いて言ひたすならば、時機が良いか、悪いかと云ふ、其の將能の狀況等に就きましては新聞や雜誌に何度も書きまして分つて居りますから、今日私は一向其事に觸れる考はありません。又私は今假回參謀からお話がありましたやうに、私の眼で見たと云ふことと以外には何もないのでして、何時も眼鏡で以て自分は砲術長と云ふ立場から敵艦隊の方を見て居る、時に敵の横の進つた時ですから眼鏡は放さないのであります。ありうるうちに彼我艦隊の接近戰も意外に早く、三哩の距離固定儀は既に敵との最遠距離八千五百メートルと云ふ報告がありましたが、私は何時も敵は風上では出來ませんと、ありう云ふと

海軍

37

(木田納)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

とを何遍も秋山参謀に申して居りましたので、どうしても風下から戦をしなければならぬと云ふ話をして居りましたが、私は誰に云ふともなしにもう氣が氣でなく「もう八千五百メートルです」と獣言のやうにどなりました、所が加藤参謀長がいきなり「砲術長、君一ッスオーロフを砲り測つてゝくれ給へ」と云ふので、私はすぐ長谷川清少尉に代つて距離測定儀について測つてみますと、敵の先頭にあるスオーロフとの距離は正に八千メートル、それで私は「もう八千であります」と大聲で報告し、「どちらの側で戦をなさるのですか」と云ふことを大きな聲で怒鳴ひました、從つて私は東郷長官と談論する餘地はないし、あゝ云ふ時に曲げられるのも長官が曲げられるので、それ迄は参謀長が艦長に向つては頻々

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の議論をされて居つたが、艦長は何時も眞直に行かうぢやないかと云ふことを云はれて居つた。きうして私が質問すると同時の位に長官の右の手がきつと左方に半円を描かれ、加藤參謀長と顔を見合せて何か云つたかなと見えたその刹那に「艦長、取舵に、取舵一杯に」と云ふことを參謀長が慌に云はれた、これは新聞の座談會其他でも話して居りますやうに、これは慌にかうやられたのでありますが、これから私は舵輪の方の號令を掛けるのであつて、あれをどつちにどうだなと云ふ議論のある餘はないので、あゝ云ふ樣に曲げられるのは他でもう終つたことは議論はないのですが、私の申上げようと云ふのはその前の時のことであります。それは大轉舵を致します二十五分前に聯合艦隊が敵を初めて南面方に發

（木田納）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

見して益々戦闘の行動をとられた所謂一時四十分のあの面舵轉舵に付いて今日一言申上げたいことは斯う云ふことであります。當日三笠の司令部には觸接部隊より時々刻々敵の報告を得て居りましたが、いかゝに も海上には濛氣があつて眼界五、六浬位を出でず、どう云ふ隊勢で戰を始めやうか、又始まるようになるかと云ふことに付いて非常に長官は心を痛めて居られたと思ひます。それで、今、飯田中將からのお話にありましたやうに、沖の島の北方に進出した艦隊は十二時に敵遠南西から一旦西の方に向つた、それから一時三十一分に南々西に進路を變へて南の方に下ると、五六分經つと初めて敵の影が薄ボンヤリと濛氣の間に見えた、勿論敵に敵が居ると云ふだけで隊形も判らず、無論その行進方針も判ら

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ないのでありますが、兎に角敵艦隊の風上側に位置する必要もあり、それですぐ面舵の號令が掛けられたのであります。其時の三笠の最上艦橋に於ける光景はまあ初めて壕氣の間から敵を見たのでありますから、大部分の人が皆敵を見て居る、さうして居るともう皆方から戰をしなければならぬと云ふやうな多少議論もありました、兎に角三笠の艦橋は混雜したと私は見て居りましたのであります。

面舵は取つた、取つたが誰も舵をもどして定針するものはない、艦長は參謀長と何か頻りに話して居られるし航海長は航海士と共に海圖に今の敵發見の艦の位置を入れるに熱中して居られる三笠の艦首は廻るばかり、そこで私は之は容易ならぬと思つて秋山參謀に「おい、秋山どこ迄

（本田稔）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

腰を廻はそうと云よのだい」と聲を掛けますと、秋山君は其時何をして居られたか確と覺えないが、卽座に「その邊で軍宣傳にしてくれ」と言はれましたが私は之を艦長、航海長に傳へる余裕もないと思つて私自身「コンパス」の側方に付てゐる「ラッパ」管に口を付けて「戻せ宣傳今の處ゆ」と一氣に怒鳴つたのである、暫くて定針した旨のが[illegible]であつて私は秋山參謀に「今少しもとに戻さんでもよい樣か」と金を押したが秋山君が「いやその邊でまあ、よかろう」と答へられたので其儘にしたのである、之れが實にあの、合戰圖にもある[illegible]の北西[illegible]微北の艦隊の變針なのである、砲術長が轉舵の場合も變なものだが實際は左樣な次第であつた、扨て此の[illegible]も一度變針して思ひ切つて北西に上つたことは此

（末田稿）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

間にどうぞから戰鬪進力に增進したり敵の陣形行動等を確實に認識したり敵前大角度の正面變換をやつたりするにも自から余裕を有せしむる樣な形にもなつたのであるが此點陶は計畫的に行はれたものではなく今迄へた如く瀧雜の裡に演ぜられた一つの偶然からの結果であることを申して置く次第である、この話は從來二三回は眞實の友達岡志の座談の時は申した外大學校長をして居られた時の高橋中將にこの話をしたことがありますが、公の席は勿論普通の場合はこの話をしたことはありません。それは總裁長があゝ云ふ舵を取つたゝと云ふことは決して自分のすべきことでない、私、今日のやうな會には恰度申上げて置くのに適當と認めて申上げるのでありますが、この場合恐らくウエストの方に一面の方に行

（本田）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

かうと云ふことは大体の見当であつたと思ひますが、それに進力も十二節でありますから戦闘の進力になつたと云ふ所までは行つて居ない、それが十分間に敵のすぐ側へ行つたでして、この進航のことが若干の其点に余裕を生じてゐると云ふ立派な行動が出来たことゝ思ひます。やはりこれは天祐の一つと私は信じて居る次第であります。

陸部大將　まだ左に廻る前ですか、

安保大將　それは此点に間がありますが、この敵を初めて見て固統にしようと云ふからその如く百二十度廻つた、敵前に於てゐゝ云ふ大角度をしてもま

（米田稔）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

だ六千四百で戦を始めるだけの余裕がありつゝに理由であります。

防衛大將

次の問題に移ります。「荷受除の計畫中止の顛末」に就て御説明中將に御願ひ致します。

（木田納）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp